

日立コミュニケーションネットワークス

# メルールの無線LANで全社をカバー 外勤部門の内線180台をすべてE02SAに



日立コミュニケーションネットワークス  
取締役社長  
林 勉氏



日立コミュニケーションネットワークス  
技術本部ソリューションシステム部 部長  
永井義行氏

日立コミュニケーションネットワークスは、本社の内線電話網をIP化。メルールの無線LANシステムと無線LAN対応携帯電話180台によるモバイルセントレックスを導入することで外勤部門のコミュニケーション環境の効率化を実現した。

日立コミュニケーションネットワークス(日立コムネット)は、全国に約4000社の顧客企業を持つ有力ネットワークインテグレーターである。

同社は今年8月に本社を東京都大田区大森北に移転したのを機に内線電話網をIP化。さらに、メルー・ネットワークスの無線LANソリューションとKDDIの無線LAN対応携帯電話「E02SA」を用いて、携帯電話をオフィスでは無線IP電話としても利用できるようにする「モバイルセントレックスシステム」を構築した。

今回、日立コムネットが構築したIP電話システムは、SIPサーバーに「TM-」（日立コミュニケーションテクノロジー製）を用いるもので、その配下で固定IP電話機75台、さらに3フロアに計10台設置された無線LANアクセスポイントを経由してE02SA約180台が稼働している。

管理部門の社員のデスク上には固定電話機が配置されているが、「外勤部門」である営業職や技術職の社員にはE02SAが支給され、社内ではこれを内線として利用する形となる。

同社がこのシステムを導入した狙いの1つは、携帯電話と内線電話との統合により業務効率を向上させることにあった。

システムの構築を手がけた日立コムネット技術本部ソリューションシステム部部長の永井義行氏は、このシステム導入の最大のメリットを「内線やダイヤルインで着信した電話が社内のどこにいても受けられるようになったことだ」と説明する。

さらに、携帯電話と内線電話が一体となることで、電話帳が共通で利用できるというメリットも生じた。

また日立コムネットのシステムでは、社内でE02SAから発信する場合、内線、外線発信、携帯発信の3つの選択肢が表示され、これを選択して発信する形となるので、社内からの通話はすべてテレフォニーサーバー経由となり通信コストも低減できる。無線LANのエリア外に出た時には、携帯発信以外は行えないので操作にとまどうこともない。

### ユーザー目線で改善提案も

日立コムネットのモバイルセントレックスの導入にはもう1つの狙いがあった。自社でシステムを導入することで、運用面でのノウハウを蓄積することだ。

日立コムネットは、05年に大阪のホテルにメルールの製品による日本初となる無線IP電話システムを構築するなど、この分野で高い実績を持つ企業だ。今年日立プラントテクノロジーが稼働させた700台規模のE02SAによるモバイルセントレックスシステムの構築も同社が手がけている。

しかし、同社社長の林勉氏は「普及が進めば、システム構築技術だけでは、ユーザーのニーズは満たせなくなる」と見る。「自らシステムを導入して、運用することで得られる、使い勝手や細かなノウハウをお伝えできることが、お客様に御導入いただく上での鍵になる」というのだ。

実際、新システムの稼働と同時にいくつかの要望が社内からあがってきたという。その1つに電話機の機能に対する指摘があった。

今回のIP電話システムの導入はあくまでも新社屋への移転に伴うもので、組織や業務プロセスには変更はない。部門の代表番号やダイヤルインで不在のメンバーにかかってくる電話をグループ着信で受けられるという運用も従来通りだ。そのためにそれぞれの「島」には固定電話機が1~2台置かれている。もちろん各人のE02SAで受けることもできる。

ところが、E02SAには、屋外での利用を想定して、端末を閉じると自動的にセキュリティロックがかかる機能がある。

自分の番号に着信する通話以外をピックアップする場合は、暗証番号を入力してロックを解除する必要があるため「ややもすると電話が切れてしまう」という声が寄せられた。そこで同社では「ユーザーの目線」でKDDIに改善要望を出したという。

こうした声を受けてKDDIはE02SAの機能改善を検討している。

この他にも細かな要望が出されているというが、これらは同社が今後システム提案を行う上で貴重なノウハウとなっていくはずだ。

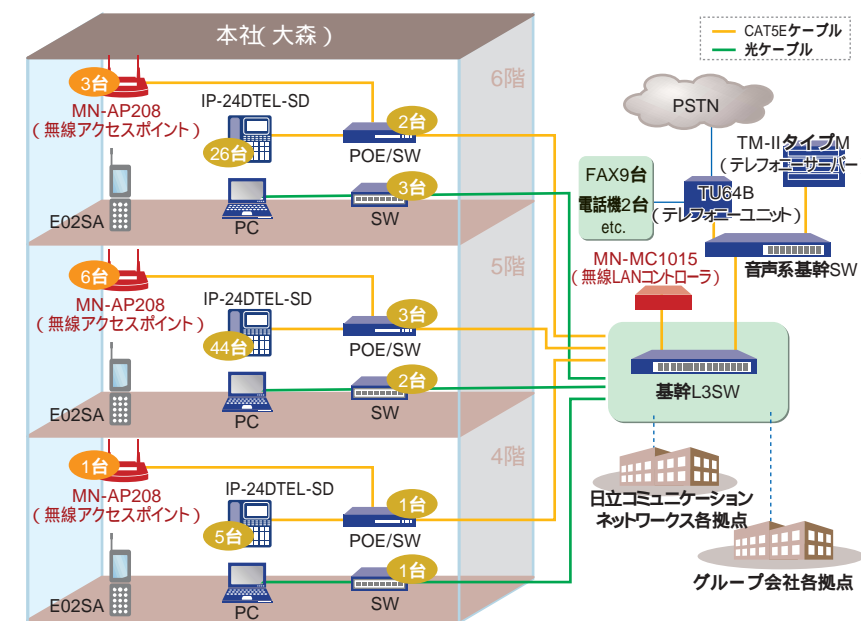
### バーチャル・セルを評価

日立コムネットは、メルー以外の無線IP電話向け製品も広く取り扱っている。自社のシステムにメルー・ネットワークスのソリューションを選んだのはなぜなのだろうか。

永井氏は「何より大きかったのがバーチャル・セルを利用できたことだ」という。

バーチャル・セルは、複数のアクセスポイン

図 日立コミュニケーションネットワークスの内線IP電話網



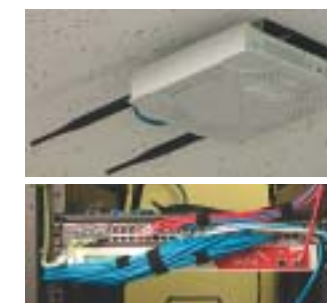
トを仮想的に1つのものとして扱うことで置局設計を効率化するメルールのソリューション独自の技術。一般には大規模システムの構築で威力を発揮するといわれるが、同氏は「10カ所程度のアクセスポイントのシステムでも相当効果がある」という。

加えてメルー製品の特徴であるデータと混在しても音声通信への影響が少ないという点、さらに、日立情報通信エンジニアリングの技術力、サポート力も選択上の大きなポイントになったという。

移転が決まってからの準備期間が短かったため、現在のシステムは既存の固定電話の機能をIP電話上で実現することに重点が置かれたものになっているが、永井氏は「お客様に提案するためにも今後インスタントメッセージやプレゼンスなどのIP電話向けアプリケーションを積極的に導入していきたい」という。モバイルセントレックスの導入を機に、同社の業務のIT化も急速に進展することになりそうだ。

**お問い合わせ先**  
日立情報通信エンジニアリング株式会社  
TEL : 050-5525-6315  
URL : <http://www.hitachi-jten.co.jp/prod/meru/index.html>

\*バーチャル・セルはメルー・ネットワークスの登録商標です。



メルー製アクセスポイント(上)と無線LANコントローラ(下)